

インドネシアの子ども達から感じたこと

—— 現地校交流を通して ——

前ジャカルタ日本人学校 教諭

富山県射水市立新湊南部中学校 教諭 中 澤 暢 雄

キーワード：現地理解，現地校交流，ボランティア，国際理解教育

1. はじめに

(1) インドネシアの教育事情

急速な経済発展に伴い、慢性化する渋滞と次々に建てられる高層ビルの片隅に、物乞いをし、ゴミを漁って生活をしている人々がいる。ジャカルタに来て最初に目に付いたのが、この大きな貧富の差であった。人口1,000万人以上といわれるアジア屈指の大都市には、目を疑うくらい裕福な人々と、明日の糧もままならない人々が隣合わせで生きている。

インドネシアは義務教育制であるが、貧困層の子どもの中には学校に通えない者も多い。読み書きも満足にできない彼らは、大人になっても収入の低い職にしか就けないため、貧困のサイクルから抜け出せずにいる。しかし、中には私費を投じ、寄付を募り、学校をつくって貧しい家庭の子ども達に教育を受けさせようと奮闘する人々も少なくない。また、そんな境遇にもかかわらず、たくましく生き、学ぶことに一生懸命な子ども達の姿もたくさん見ることができた。

(2) ジャカルタ日本人学校

ジャカルタ日本人学校は、インドネシアの首都ジャカルタの郊外に位置する。好景気に着目した日本企業の進出が勢いを増し、赴任した当初は700人程度だった生徒数も、現在では小中学部合わせて1,100人を超える。また、世界第4位の人口を擁するインドネシアは国民平均年齢が28歳という若者の多い国で、街を歩いていても、車から外を眺めても、子どもの姿をよく見かける。だからジャカルタ日本人学校の周辺にも多くの現地校があり、中には生徒数1,000人を超える大きな学校もある。

日本とインドネシアの良好な関係もあって、全学年が現地校との交流に取り組んでいる。日本の遊びや文化を紹介したり、インドネシアの遊びを教えてもらったり、互いの国の伝統的な食事を一緒に作って食べたりといった活動で交流している。

2. 現地校への訪問を通して

インドネシアの人々の日本に対する理解は驚くほど深く、国立大学のほとんどに日本語学科が設けられ、中学校や高校でもカリキュラムに日本語を取り入れているところもある。赴任中、いくつかの学校で、翻訳絵本の読み聞かせをしたり、歌や書道、折り紙などの日本文化の紹介を行ったりする機会に恵まれた。現地の子どもの相手授業では、彼らの好奇心に満ちた目や、拙いインドネシア語の話に真剣に耳を傾けてくれる姿が、教員として子どもと接する喜びを再認識させてくれた。

(1) サンガル・グヌン・バロン校

廃棄物の回収で生計を立てる人々の集落にあった校舎のない学校。それが、初めてジャカルタで訪れた現地校、サンガル・グヌン・バロン校だった。華僑系インドネシア人の女性が私費で運営している学校で、教師は全て彼女とその知人のボランティアだ。赴任して間もない頃、修了式セレモニーのゲストとして招待され、その現状に啞然とした。

ジャカルタにはこのような人々の集落が数百はあると言われ、彼らは集めた廃棄物の中で生活をしている。この学校もその集落の一角にあり、住人の数は数百人。学齢の子どもだけでも100人近くいるが、とても人間が住める環境とは言えない。しかし、熱心なボランティアの人々のおかげで、彼らの教育水準は高く、子ども達の多くが英語を話すことができ、情操教育として行っている絵や音楽の授業も質の高いものであることに驚かされる。特に、セレモニーで奏でられた彼らのアングロン（竹でできた伝統楽器）の演奏は素晴らしいものであった。

(2) イブヌ・シナ校

イブヌ・シナ校は、日本人学校から車で10分のところにある。低所得者層の人々が暮らす村に学校を建設しようと近隣の人々が資金を出し合い、2011年に開校した中学校だ。このような私設学校は、日本人学校の周りだけでも数十存在するという。

2010年、ある小学5年生の生徒が、ピアノ発表のためにチャリティ・コンサートを開き、そこで得た収益を現地の学校に寄付しようと考えたことが始まりだった。担任の先生が「どうせなら、お金ではなくて学習の役に立つものを贈ろう」と提案し、この学校にリコーダーを寄贈した。リコーダーを寄贈しても使い方を誰も知らないもので、私と同僚の音楽科の先生でその活動を引き継ぎ、月に2～3回程度、2人でリコーダーを中心にした音楽の授業のために訪問した。土曜日の朝7時から1時間。最初は20余名ほどだった生徒も、最終的には50名を超えた。全く音楽の知識のない生徒一人ひとりに指使いや音階を理解させるのは試行錯誤の連続だった。しかし、どの生徒もモチベーションは高く、真剣に取り組んでいた。そのうちに生徒たちの特質や個性も見えてきて、一生懸命練習して、ものすごいスピードで修得する生徒もいれば、プライドがあるのか、男子の中には格好を付けて、できないのを隠そうとする生徒もいた。

3. 現地校とジャカルタ日本人学校の交流

現地校を知るにつれ、日本人学校との交流のあり方を考えるようになった。ジャカルタ日本人学校では、主に近隣にある比較的裕福な家庭の子女が通う現地校を交流の対象としていた。しかし、こうしたボランティアで成り立っている学校と交流したいと思い、幾つかの学校との交流活動を試みた。ただ、安全面には配慮が必要で、日本人学校を会場とした交流となった。

(1) サンガル・グヌン・バロン校との交流

① 法人支援団体と協力しての支援

ジャカルタには在留邦人による現地の人々を支援する目的の団体がいくつかある。その中の一つ「ふるさと創生財団」が、あるプロジェクトの支援先を探しているとの話を受けたのが、2010年11月だった。そのプロジェクトとは「貧困層の子ども達が、貧困から抜け出す障害になっている劣等感を克服するため、楽器を寄贈し、演奏する場をつくる」というものだった。

② 日本人学校との支援

その後、このサンガル・グヌン・バロン校への支援が決まり、財団が楽器を、演奏の機会を日本人学校で設けることになった。また、単なる演奏だけでなく、生徒会で、全校生徒から使わなくなった鍵盤ハーモニカを集めて寄贈し、吹奏楽部と演奏交流会を同時に行った。その後も、文化祭で演奏するなど、日本人学校との交流も続いている。

③ 邦人社会とのさらなる繋がりへ

ジャカルタには、日本人が主催する日本式の大きな祭りがあり、毎年数万人のインドネシア人が日本文化を体験しに訪れる。盆踊りや歌や踊りなどのステージがあるが、この交流をきっかけに、彼らは、その祭りのス



小学部での演奏会の後、
生徒会で寄贈式を行った。

テージに毎年招かれている。アンクロンの演奏も年々上達し、多くの邦人や訪れたインドネシア人から高い評価を受けることになった。現在はガムラン（鉄製の打楽器）もレパートリーに加わったようだ。ゴミの山で暮らす彼らにとって、多くの人々の前で演奏することは大きな励みになり、支援の目的が達成されつつある。

(2) イブヌ・シナ校との交流

イブヌ・シナ校の生徒は、約2年間自分がかかわってきたもう一つの生徒たちである。この2つの生徒たちの友好関係を築き、互いの理解を深めたいと強く思うようになった。



各自が考えた方法でリコーダーを教えた。

① 事前準備

2012年度からは、新しい音楽の先生と訪問授業を続けた。その先生がリコーダーの課題に「ふるさと」を提案してくれた。日本の代表的な唱歌であること、リコーダーの練習にふさわしいことなどから、中学部1年生で、この曲を使った現地校交流をすることに決めた。事前準備として、訪問授業の際にイブヌ・シナ校の生徒に「ふるさと」の指使いと音階の基礎を指導した。日本人学校の音楽の授業でも同じ「ふるさと」を練習し、彼らに現地校の生徒に教えるコツを指導した。

② 交流の実際

その後、予め決めていた12のグループに分かれて「ふるさと」の合奏の練習を行った。熱心に教えるグループ、自分たちで用意してきたアイスブレイクを行うグループ、インドネシア語が話せる生徒は積極的に話しかけ、それぞれのグループが創意工夫を凝らしてかかわっていた。途中の休憩では、互いに軽食を用意し、食の交流も行った。最後は、体育館に集まってグループごとの「ふるさと」の演奏披露と、互いの学校の発表会を行った。我々は合唱コンクールで歌った合唱を、イブヌ・シナ校はアンクロンと伝統的な踊りを披露した。

③ 活動の成果

我々が彼らに音楽の授業をしていたこともあり、音楽を通じた交流は互いの文化を知る上でも、互いの言葉が全く通じない同士のコミュニケーションを取る上でもよかったと思う。リコーダーの課題を「ふるさと」という日本の唱歌にしたのも、日本文化の紹介にもなった。何より、互いがより親密になることができた。中には連絡先を交換し、メール等で連絡を取り合っている生徒もいる。

4. インドネシアの子ども達から感じること

日本人学校の仕事は、基本的には日本の学校と同じである。学校規模や治安によって、危機管理にかかわる仕事があったり、日本人会の行事に協力したりと、海外ならではの仕事もあるが、学校の中で授業をし、子ども達と接し、職員会議や研修も日本とほぼ同じである。その中で、海外ならではの活動として現地校交流を行っているのは、どの日本人学校もきっと同じだろう。

では、インドネシアでしかできない現地校交流とは何だろうか。外国人と交流するのなら、ジャカルタに幾つもあるインターナショナル・スクールの生徒と交流した方が、多くの国の生徒とかかわれるし、英語を使ってコミュニケーションも取りやすいはずだ。

それでもあえてインドネシアの学校と、と考えたのは、「交流を通してインドネシアの子ども達のたくましさを感じて欲しい」という思いからだ。私が彼らと実際に接してみて印象的だったのは、貧しさをものともしない笑顔、そして、境遇に負けずに未来に希望をもって生きる姿だった。在任中、幼稚園から大学まで、様々な校種の学校を訪問した。言葉で説明するのは難しいが、どの学校の子供達からも、今の日本の子供達にはないたくましさを感じたし、その度に私自身も活力をもらった。

多くの在留邦人の方々がインドネシアの魅力の一つは「昭和の日本を思い出させる」ことだと言っていたが、私も同感である。また、在任中に東日本大震災が起き、インドネシアでは「頑張れ日本」を合い言葉に多くの

人々が支援活動に取り組んでくれた。

日本の古きよき時代を彷彿とさせる雰囲気，日本への思いやりの気持ちを，インドネシアのよさとして生徒達にも実感してほしいと思って取り組んだ現地校交流だった。交流活動を通して，ジャカルタ日本人学校の生徒が同じように感じてくれていたらと思う。